東京未来大学研究紀要　2011年　第4号　pp.37-43

保育士の専門性における構成要因の検討

―保育士志向学生の自己評価から―

野田　敦史・藤田　雅子

A Component of Professionalism in Child Care Worker:
Based on Students' Self-Assessments

Atsushi Noda and Masako Fujita

要約

本研究の目的は、保育士の専門性を構成する要因の関連性について明らかにしたものである。この目的達成のために以下の手順で検討を行った。1）保育士の専門性を構成する要因とその関係性を示す仮説図を作成した。2）仮説で想定した要因を既存の資料を参考に質問紙を作成し、都内某私立大学保育専攻学生を対象に調査を行った。3）調査結果を得点化し、項目の傾向を把握した。4）収集した調査データをもとに因子分析を行い、因子ごとに尺度得点を求めた。5）尺度得点を用いて、相互相関を求め、因子の関連性について検討した。結果、項目素点から表現された保育士像は、「子どもや他保育士との直接的関係」には自信があるものの、「子どもや他保育士との間接的関係」や「社会との直接的間接的関係」の場面において自信がないことが示された。また、保育士の専門性を構成する要因は、「社会福祉援助力」、「保育士として力」、「社会人基礎力」の3要因で説明でき、各要因には中程度の正の相関関係があった。

キーワード

保育士資格、　保育士の専門性、　保育士倫理綱領

1. 緒　言

保育士資格の起源は、昭和23（1948）年、児童福祉法施行令第13条「児童福祉施設において、児童の保育に従事する者を保育士といい、厚生労働大臣の指定する保育士を養成する学校その他の施設を卒業した者、保育士試験に合格した者をもってこれに充てる」に端を発する。その後、平成13（2001）年、児童福祉法改正において、第18条の4「保育士とは、第18条の18第1項の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」とされ、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士に並んで、国家資格化された福祉専門職である。この歴史が意味することは、保育士資格が児童福祉施設の任用資格から名称独占資格に改められ、児童に加え、その保護者に対して保育に関する指導を行うことが新たな保育士の機能として位置づけられた転換期、換言すれば、福祉専門職としての専門性の向上とそれを構成する要因を問う萌芽期であったと考えられる。

具体的には、実践領域において、「全国保育士会倫理綱領」[1]で「（保育士）自らの人間性と専門性の向上（の必要性）」が、「保育所保育指針」[2]で職員の資質向上および職員全体の専門性の向上を図る」が、明記されたこと等によって、専門性の向上の必要性が説かれている。

これと並行して、研究領域でも、保育士の専門性に関する研究が行われてきた。例えば、保育士の資質の分析に関する研究[3]や専門性を構成する要因に関する研究[4]などがこれに該当するものである。さらに、これらの研究は、「専門性」を能動的に捉えようとするものと、受動的に捉えようとするものに大別できる。前者は、主に現場保育士を対象として、インタビューや実習評価のコメントから捉えようとする立場で、後者は、現場保育士や学生を対象に、先行研究に基づく構成要素、あるいは養成教育カリキュラム等に基づいて質問項目を設定し、アンケート調査から捉えようとする立場である。両者間

の差異は、研究成果を保育現場に還元するのか、あるいは養成教育現場で活用するのかによって生じてくるものと想定される。

これら保育士資格の変容過程とそれを背景とした実践領域および研究領域における動向を概括的に述べてきた。これらから分かることは、実践領域において児童福祉法改正を契機とした保育士の専門性の向上と必要性が問われ、研究領域において、その専門性の構成する要因は何か、あるいは、その構成要因で保育・養成現場を見た時、どのような実態が存在しているかを紐解こうとする営みであったと解釈できる。しかしながら、未だ、その専門性の構成要素は、保育領域の実践者と研究者において共通の見解に至っていない。すなわち、保育現場から求められる専門性と養成教育現場で学ぶ専門性に乖離が存在していることを表しているものと理解できる。

そこで本研究では、保育士の専門性を構成する要因を、保育現場と養成教育現場との両者が共通認識できるフィールドから構成されていることを前提に質問紙を作成し、探索的に専門性の構成要素を抽出する方向性を定めた。その理由は、抽出した構成要因をもとに養成教育現場で保育士を志向する学生の状態像の把握の基準になり得る可能性があり、同時に保育現場が求めている保育士像が具体化できるものとなることを期待したからである。

2. 研究の目的

本研究は、保育士の専門性を構成する要因を仮説図として作り、統計学的手法を用いて要因を抽出し、仮説図の実証に向けた要因の関連性について検討するものである。

3. 研究方法

この目的達成のために以下の手順で検討を行った。1）保育士の専門性を構成する要因とその関係性を示す仮説図を作成した（Figure 1）。2）仮説で想定した要因を既存の資料を参考に質問紙を作成し調査を行った。3）調査結果を得点化し、項目の傾向を把握した。4）収集した調査データをもとに因子分析を行い、因子ごとに尺度得点を求めた。5）尺度得点を用いて、相互相関を求め、因子の関連性について検討した。

具体的な方法及び配慮については、次のとおりとした。

（1）調査対象者

都内某私立大学保育専攻の学生3年生を対象に社会福祉援助技術科目の時間を利用して、自記式質問紙を配布し、「保育士として、福祉関係職員として求められる力を表した自己評価表であること」を説明し調査を実施した。記入後は各個人が用紙を伏せて教員が回収した。回収した134名を分析対象データとした。

（2）倫理的配慮

調査配布時に、結果は数値化して統計的に処理し、個人名等のプライバシーの保護には十分配慮すること。調査データは、学生個人の自己評価と調査研究以外には使用しないことを説明し、記入し提出することにより調査の協力に同意が得られたものとした。

（3）調査内容

保育士の専門性を構成する要因として、①社会人基礎力（Social basic power）、②保育士としての力（Child care workers power）③社会福祉援助技術力（Social work power）と想定した。①社会人基礎力は、施設現場職員に対して使用している「職員研修プログラム社会人基礎力」[5]を参考に全12項目（S01 ～ S12）採用し、②保育士としての力は、「全国保育士会倫理綱領」を参考に12項目（C01 ～ C12）を作成し、③社会福祉援助技術力は、本学「施

設実習評価表」を参考に14項目（W01 ～ W14）を作成した。いずれの質問紙も自己評価基準は、「5　自分の力は完璧だと思う」、「4　自分の力は十分だと思う」、「3　自分の力は人並だと思う」、「2　自分の力は、足りないと思う」、「1　自分の力は、ほとんどないと思う」の5段階法で把握した。

4. 本研究の仮説

本研究の目的である「専門性の要因の抽出と関連性の検討」にあたり、以下の観点から、仮説を立て、右図を作成した。なお、Figure 1のモデルで示す略語（S）は、Social basic powerのSを、（C）はChild care workers powerのCを、（W）は、WelfareのWを使用した。

まず、保育士の専門性は、社会福祉専門職の専門性を背景として構成されていることを想定した。社会福祉専門職の専門性について高橋（1999）[6]は、「第一は、福祉倫理（福祉観、人権の尊重、自立・自己実現の援助など視座、守秘義務等ソーシャルワーカーとしての価値観、第二は、専門知識（歴史、理論、知識、公私社会福祉制度、隣接科学に関する知識など）、第三は、専門技術（固有の援助方法・技術、技能）の三要素に集約できる。そして、これらの専門性を基盤として社会性（一般教養、豊かな生活経験・人間関係等）が考えられる）」と説明している。よって、要因を読み取る背景としては、これら三要素が含まれる項目を考慮に入れた。また、保育士が実践する現場を保育所のみならず幅広く社会福祉施設現場と捉え、かつ実際に施設現場職員が活用している要因も含まれることを想定して項目を選定した。

つぎに、保育領域独自の専門性について構成要素が存在することを想定した。大嶋（2008）[7]は、「保育士としての専門性の要素として①体系的な理論と技術、②体系的な養成課程と現任訓練、③専門職と

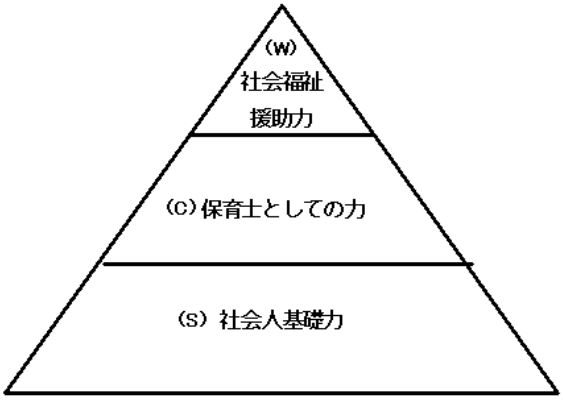

Figure 1　保育士専門性の構成要因と構造

しての組織化、④倫理綱領、⑤テストか学歴による社会的承認等があげられる」と説明している。よって、要因のひとつに倫理綱領を含む領域を入れる必要性を考慮した。

最後に、社会福祉専門職の構造について京極（1987）[8]は、基礎知識（一般教養・関連知識）と専門的技術（社会福祉援助技術、施設援助方法等）と倫理（自立支援の視座等）の三点を三角形に整理し、基底を基礎知識、二番目を専門知識、最上階を倫理で表現したことから、これを参考に、階層構造を示すことを想定した。

5. 調査および分析結果

（1）記述統計

保育士の専門性を構成すると思われる質問紙項目38項目のうち、平均値を算出し、昇順上位5項目と降順上位5項目をそれぞれTable1-1およびTable1-2に示す。

昇順上位5項目は、C07「プライバシーを保護する力」、S11「社会のルールや人との約束を守る力」、S08「相手の意見を丁寧に聴く力」、S09「意見や立場の違いを理解する力」、W10「チームワークを理解する力」であった。

降順上位5項目は、C02「保護者の子育てを支える力」、C10「子どもの立場や保護者のニーズを代

Table 1-1　保育士専門性質問項目（昇順上位 5 項目）

	項目内容	平均値	標準偏差
C07	プライバシーを保護する力	3.75	0.96
S11	社会のルールや人との約束を守る力	3.65	0.79
S08	相手の意見を丁寧に聞く力	3.55	0.81
S09	意見や立場の違いを理解する力	3.44	0.80
W10	チームワークを理解する力	3.39	0.79

Table 1-2　保育士専門性質問項目（降順上位 5 項目）

番号	項目内容	平均値	標準偏差
C02	保護者の子育てを支える力	2.43	0.73
C10	子どもの立場や保護者のニーズを代弁する力	2.66	0.82
S07	自分の意見をわかりやすく伝える力	2.69	0.91
W12	記録をとる力	2.69	0.89
W08	援助計画を理解する力	2.71	0.66

弁する力」、S07「自分の意見をわかりやすく伝える力」、W12「記録をとる力」、W08「援助計画を理解する力」であった。

（2）因子分析

保育士の専門性を構成すると思われる質問紙項目38項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。

固有値の変化は、10.34, 3.66, 2.23, 1.49, 1.41というものであり、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、0.35を基準に因子負荷量の小さい4項目（W12,S08,S11,S12）を除き、再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析をおこなった。その結果、固有値の減衰状況と因子解釈可能性から3因子を抽出した（Table 2）。

各因子は、以下のように解釈された。第1因子は、すべての項目が「保育士としての力」からなっており、第2因子は、すべての項目が「社会福祉援助力」からなっており、第3因子は、すべての項目が「社会人基礎力」からなっていたので、そのままの名称を因子名として命名した。

Table 2　保育士専門性　因子分析結果

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
C11	地域の子育てを支援する力	**0.825**	-0.067	-0.104
C12	専門職の向上と責務を果たす力	**0.776**	0.028	-0.056
C04	子どもの最善の利益を尊重する力	**0.756**	0.050	-0.030
C03	子どもと子育てにやさしい社会をつくる力	**0.716**	0.084	-0.010
C02	保護者の子育てを支える力	**0.710**	0.015	-0.010
C01	子どもの育ちを支える力	**0.683**	-0.016	0.043
C05	子どもの発達を保障する力	**0.650**	0.000	0.011
C10	子どもの立場や保護者のニーズを代弁する力	**0.639**	0.048	0.008
C09	子どもの視点に立って自己評価する力	**0.632**	-0.022	0.076
C06	保護者との協力関係を築く力	**0.581**	0.044	0.164
C08	職場のチームワークや専門機関との連携を大切にする力	**0.579**	-0.025	0.151
C07	プライバシーを保護する力	**0.483**	-0.109	0.236
W14	利用者と自己の健康や安全を配慮する力	-0.122	**0.733**	-0.075
W11	家庭や地域との連携を図る力	0.108	**0.701**	-0.209
W09	援助技術を習得する力	0.005	**0.697**	0.004
W10	チームワークを理解する力	0.022	**0.684**	0.085
W07	利用者のニーズを理解し、かかわる力	0.186	**0.683**	-0.282
W08	援助計画を理解する力	-0.038	**0.634**	-0.113
W13	職業倫理を尊重する力	0.112	**0.620**	-0.060
W06	施設における一日の流れを把握する力	0.046	**0.606**	0.054
W03	社会福祉施設の仕事に探究心を抱く力	-0.181	**0.595**	0.170
W01	社会福祉施設の仕事に意欲的・積極的に取り組む力	-0.207	**0.561**	0.309
W05	施設を理解する力	0.134	**0.542**	0.003
W02	社会福祉施設の仕事に対して責任感を持つ力	-0.101	**0.468**	0.337
W04	社会福祉施設の仕事で強靭性を持つ力	0.084	**0.467**	0.137
S04	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	-0.003	-0.133	**0.744**
S05	課題解決に向けプロセスを明らかにし準備する力	0.148	-0.041	**0.594**
S06	新しい価値を生み出す力	0.101	0.032	**0.575**
S02	他人に働きかけ巻き込む力	-0.016	-0.081	**0.564**
S10	周囲の人々の物事と自分の関係を理解する力	0.052	0.001	**0.494**
S01	物事に進んで取り組む力	-0.037	0.214	**0.487**
S07	自分の意見をわかりやすく伝える力	0.007	-0.003	**0.479**
S03	目的を設定し確実に行動する力	0.151	0.064	**0.436**
S09	意見や立場の違いを理解する力	0.231	-0.078	**0.390**
	因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
		—	0.43	0.54
			—	0.42
				—

Table 3　保育士専門性下位尺度間相関と平均値、標準偏差

	保育士力	社会福祉援助力	社会人基礎力	平均値	標準偏差
保育士力	—	0.43**	0.57**	35.13	7.19
社会福祉援助力		—	0.41**	38.90	6.59
社会人基礎力			—	26.59	4.66

** p<.001

（3）下位尺度間の関連

保育士専門性の因子分析結果において、各因子に高い負荷量を示した項目の合計得点を下位尺度得点とした。Table 3に下位尺度得点の平均値と標準偏差を示す。内的整合性を検討するためにα係数を算出したところ、「保育士としての力」で.92、「社会福祉援助力」で.89、「社会人基礎力」で.81と十分な値が得られた。

同様に保育士専門性の下位尺度間相関をTable 3に示す。各下位尺度は、相互に有意な正の相関を示した。

6. 考察及び結論

（1）自己評価素点に表現された保育士像

保育士の専門性を構成すると思われる質問紙項目38項目のうち、平均値を算出し、昇順上位5項目と降順上位5項目の記述統計結果から、調査対象学生の自己評価素点に表現されている実態は、保育士が関わる対象領域（子ども、他保育士、社会）と、その関係性の質的種類（直接的、間接的）の組み合わせによって表現できると考えた。具体的には、①子どもや他保育士との直接的関係、②子どもや他保育士との間接的関係、③社会との直接的間接的関係の3領域で表現でき、平均値の高低から次のモデル（Figure 2）が想定できた。

以上の結果により本調査における自己評価素点に表現された保育士像は、社会人基礎力に示されるように、傾聴性、柔軟性、規律性は、高いが、しかしながら課題発見力、計画力、創造力、発信力が弱い

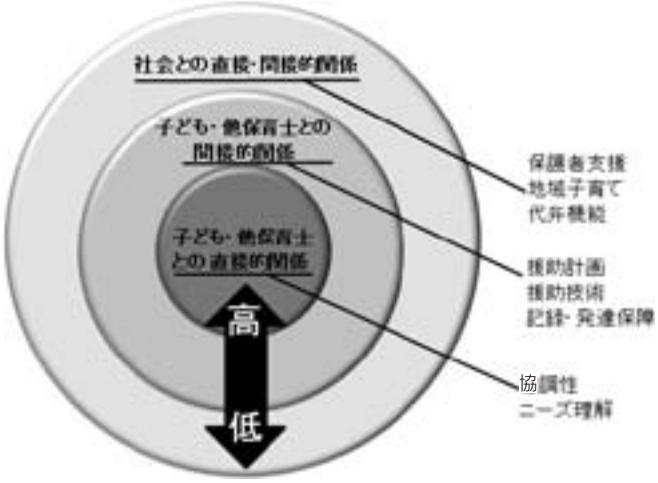

Figure 2　調査対象学生の自己評価に表現された保育士像モデル

傾向にあった。具体的には、仕事上での他保育士との協調性、子どものニーズ理解等に対しては自信を持っているが、援助計画や援助技術、記録をとる力、また、子どもの発達を保障する力などについては、弱さを感じている学生もおり、さらには、保護者支援、地域の子育て、社会構築、代弁機能、職業倫理における力については、それよりも顕著に力を持っていないと感じている傾向にあることが推察できた。

これらの傾向は、2008年に改定された保育所保育指針にある「保護者の子育て支援」が加えられた点と項目を鑑みると、養成教育上の課題としても捉えることができる。すなわち、今後、学生が保育士として社会人になった時に保護者を含めた地域社会に対して、理念的にも実践的にもある程度の自覚と自信を持った対応ができるような教育方法とカリキュラムに反映できるかが課題として挙げられる。

（2）保育士の専門性における構成要因

保育士の専門性を構成する要因として、統計学的分析から「保育士としての力」、「社会福祉援助力」および「社会人基礎力」の3要因を抽出することができた。このことは、保育士の専門性の要因は、3要因で説明できることと、要因の種類は、「社会福

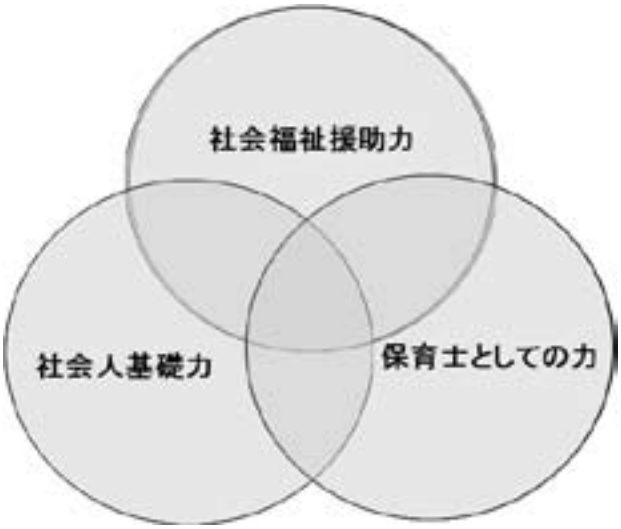

Figure 3　研究結果から想定された保育士専門性要因モデル

祉援助力」と「保育士として力」、「社会人基礎力」で説明できることが実証でき、この部分において当初の仮説を支持するものである。

しかし、Figure 1に示した階層構造と、その要因の生成順位は、今回の研究において実証するには至らなかった。よって、現時点では、本研究結果から説明できる専門性の各要因の関連図は、3要因もしくは2要因が重複する部分と各3要因が単独で存在する部分から成っているモデル（Figure 3）である。今後は、この関連モデルがFigure 1のような階層構造モデルである可能性の検討として、調査対象数を増やし、縦断的研究をはじめ共分散構造分析等の統計学的手法も含め、要因とその構造について検討し、階層的構造の妥当性を検討する必要性がある。

注

(1)「全国保育士会倫理綱領」は、全国保育士会が専門職集団の行動規範として平成15（2003）年2月26日、全国保育士委員総会および平成15年3月4日、全国保育協議会協議員総会において採択されている。

(2)「保育所保育指針」は、昭和40（1965）年に作成され、平成2（1990）年および平成12（2000）年の改定を経て、平成20（2008）年の大幅な改定が行われ、平成21（2009）年4月から施行されている。特に平成20年の改定以前の保育所保育指針は、厚生労働省通知であったが、これを境に厚生労働大臣告知となり最低基準としての性格が明確になったものである。本論文で使用している用語は、現行の「保育所保育指針」を指すものとする。

(3) この研究には、島崎敬子（1997）「保母に求められる資質に関する総合的研究（3）―保母養成課程及び現職教育に関する調査」新潟県立新潟女子短期大学研究紀要（34）、矢藤誠慈郎ら（2005）「保育士の資質・力量における養成校への期待役割―保育士調査から―」保育士養成研究（23）p.67-74、大西道子（2001）「保育者の資質に関する研究（2）―幼稚園・保育園現場と学生の資質重要度の比較―」札幌大谷短期大学紀要（32）p.33-46 などがある。

(4) この研究には、伊藤利恵（2007）「福祉専門職としての保育士における価値の位置づけ―専門性の要件の検討から―」健康福祉研究（4）p.17-29、大嶋恭二（2008）「保育士の専門性と養成の課題」東洋英和大学院紀要（4）p.1-14、宮内克代（2008）「保育士の専門性を構成する要因の検討」埼玉学園大学紀要人間学部篇（8）p.91-98などがある。

(5) 社会福祉法人うらら「能力開発とやりがいを創造するキャリアパス」より3つの力（アクション・シンキング・チームワーク）と12の要素としての「社会人基礎力」を使用

(6) 社会福祉士養成講座編集委員会編『三訂社会福祉援助技術総論』中央法規出版　第1章　第1節　高橋重弘　執筆分担（1999）p.5

(7) 大嶋恭二（2008）「保育士の専門性と養成の課

題」東洋英和大学院紀要（4）　p.3
(8) 京極高宣「社会福祉の専門性の専門性について」『月刊福祉1987年8月号』全国社会福祉協議会（1987）p.44